

# 戦争に勝る花

thinkscod

## 【彼の祈り】

---

深くて濃い緑色をした森の奥に、小さな教会がある。

ステンドグラスから入ってくる木漏れ日に照らされながら、中で、一人の戦士が静かに祈りを捧げていた。

「我らを見守りし……」

漆黒の鎧と獣の仮面を身に纏って戦場を駆け抜ける彼は、誰からも『魔犬《まけん》』と恐れられている。

その鎧には妻が仕立ててくれた、小さい青い羽根の飾りが付けられていた。

「我らを見守りし、水の護り《まもり》よ。どうか、一日でも早く無事に妻の元へ帰れますように」

この地で長く続いている戦争が、彼の願いを空へ羽ばたかせてくれない。

彼は、祈りを捧げ続けた。

## 【彼女の唄】

---

街からほんの少し離れていて、森から近い場所にその家はある。

「西の門より流れるは、我らの水。廻り巡って、恵みが育つ」  
戦士の妻である彼女は、唄を歌いながら鍋一杯のジャムを煮立てていた。

唄を歌っている彼女の肌は、水のような艶を宿している。

不意に祈りを捧げている夫の声を、森が彼女の耳へ届けてくれた。

夫の優しい声と共に響いてくる血の汚れが、彼女を悲しくさせる。

「恵みよ、恵みよ。生きる力を、安らぎと優しさを伝えたまえ」  
彼女が唄を歌いながら鍋をひと混ぜると、ジャムの香りを森が彼の元へ運んでいった。

## 【出撃】

---

彼は妻が作るジャムの香りがした気がして、思わず顔をあげる。  
見えたパイプオルガンの椅子に、初めて出会ったときと同じように妻が座っている気がした。  
オルガンを奏でながら唄を歌っていた彼女を、思わず妖精と見間違えたのを覚えている。  
手紙を携えた伝書使が教会へ入ってきたのに気づき、彼は獣の仮面を身につける。  
国王から授かったこの仮面が、彼の本心を隠して戦士として存在させ続けていた。  
“南の国境へ向かい、兵団を救出して欲しい。この国で一番強い貴殿だけが頼りである”  
受け取った手紙には、国王の字でそれだけが書かれている。  
彼はもう一度パイプオルガンの方へ振り返ると、扉を開けて教会を後にした。

## 【空】

---

「魂よ、羽ばたけ。青い鳥のようにどこまでも遠くへ」

彼女は家の窓際にある、夫が愛用している大きな背もたれが付いた椅子へ深く身体を沈めている。

けれども、魂の半分は“水の護りの使い”と言い伝えられている青い鳥となって空を飛んでいた。人や、獣や、植物……ありとあらゆる生き物の怒りや無念が渦巻く空を……。

「争いが、ありとあらゆるものを汚していく」

混沌とした戦場を両断するかのよう、漆黒の鎧と獣の仮面を身につけた戦士が駆け抜けた。鳥の目を通してハッキリとわかるほど、戦士はすでに人から別のナニかへ変わりかけているのがわかる。

「私の愛しい人が、帰ってこれなくなってしまう……」

## 【足止め】

---

彼は伝書使から受け取った王の手紙にしたがって、ありとあらゆる戦場を駆け抜けていった。この日も、そう……。

「俺が行けば、きっと多くの兵士が家へ生きて帰れるかもしれないのにっ！！」  
募らせる焦りを鼻で笑われているかのように、雨と濃い霧が馬の足を鈍らせていた。

「何か、何か他に……戦場へ早く辿り着く道は無いのか？」  
地図を見てから周囲を見回してみると、霧で視界がぼやけていたが一本の巨樹を見付ける。その巨樹を囲むように、暗い森が広がっていた。

「真姿を見せつける鏡森《ますがたをみせつけるかがみもり》か」  
森の中に入った人間を妖精が惑わすと噂される森だが、戦場へ向かう近道となりそうだ。

## 【真姿を見せつける鏡森・I】

---

彼女の魂が変身した青い鳥は、新しい風に乗って本来いるべき場所へと戻っていく。  
ただ、彼を救いたい一心で雨に濡れた重い翼を羽ばたかせた。

「ようやく……帰ってきたわ」

辿り着いた場所にあるのは、とてつもなく大きな一本の巨樹。

その巨樹を囲むように、暗い森が広がっていた。

青い鳥は、巨樹の一番下に生えている細い枝に降り立った。

眼下には、巨樹を写し返している鏡のような湖が見える。

青い鳥は湖の水面を見つめると、湖の水面が盛り上がり、青い鳥を飲み込んだ。

「あなたがあのときしてくれたように、今度は私が」

## 【眠りへ】

---

彼と馬はかなりの距離を歩いて、ようやく森の中心部にある湖の近くまでやってくる。

「お前は、よく頑張ってくれた」

雨を避けられる木々の下で、彼も馬も休息を取ることにした。

焚き火を起こすと、少しずつ身体から寒さが遠のいていくのを感じる。

「この雨さえ、早く止んでくれたら……」

彼はいつの間にか、眠りへ落ちていた。

そして、彼は夢を歩く。

自分の妻と初めて出会った夢の中を

## 【夢の中・I】

---

深くて濃い緑色をした森の奥に、小さな教会がある。  
彼は戦場へ赴く朝にだけ、そこで祈りを捧げていた。  
何度も、何十も、何百も、届かぬ祈りを……。  
あくる日。彼は教会の中で、深傷を負った青い鳥を見つけた。  
「俺の手は、人を救えない。なら、せめてお前だけでも」  
手甲を外した彼の手が、優しく鳥を手当していく。

時は経ち、彼が再び戦場へ赴く朝がやってきた。  
「西の門より流れるは、我らの水。廻り巡って、恵みが育つ」  
教会の扉を開けると、オルガンを弾きながら唄を歌う彼女が見える。

## 【真姿を見せつける鏡森・II】

---

太陽の暖かさを身体で感じて、彼は目を覚ました。あれ程立ちこめていた霧も嘘のように晴れている。

「雨が止んだのか？」

森を見渡してみると、一本の大きな巨樹と、それを写し返している鏡のような湖がハッキリと見えた。

顔を洗おうと湖に近づいたとき、湖が信じられない光景を彼に見せる。

「ウソだ」

彼は、自分自身が映っているはずの水面を剣で斬りつけた。

穏やかになった水面を再び覗き込んでみて、彼の手から剣がこぼれ落ちる。

「ウソだあああっ！！」

震える手で自分の顔をさわっていくと、映っている通りに顔はケモノになっていた。

「我らを見守りし、水の護りよ。私は人間です！！……私は、私は……」

体中からケモノに相応しい体毛が生え、叫び声はケモノの遠吠えと変わり果てる。

## 【水のソノヒト】

---

『血に惑わされた哀れなケモノ……』

湖の水面が盛り上がり、高貴な女性の姿をした水のソノヒトが姿を現す。その女性の顔は、どこか残してきた妻の面影があるような気がした。

「いいえ、妖精よ。私は人間です」

『いや、哀れなケモノ。お前の鼻は血を求めている、口は喰い殺す牙を、手は切り裂く爪を』

「いいえ、私は……」

『血の匂いを求めていただろう？戦争が続けばと求めていただろう？』

そう言われて、彼は思い当たることがあった。

「……いつからか、戦場で死んでいく者達を見ても悲しくなくなっていた」

「……いつからか、剣を持つことに抵抗を感じなくなっていた」

「……いつからか、血の匂いしか感じなくなっていた」

## 【水の救い】

---

水のソノヒトは湖の中に手を入れると、そこから一輪の花を取り出す。

『血の匂いは人の恐れや怒りや恨みだけを導き、他のすべてを麻痺させる』

水のソノヒトが花に息を吹きかけると、彼は久しぶりに血以外の匂いを感じた。

「優しい香りがする……。私は、人の姿に戻る事を許されるでしょうか？」

水のソノヒトは、水で満たされた杯と一粒の種を差し出した。

『これを飲め。そして、敵も味方も関係なく……多くの者達を戦場から生きて帰すのだ』

彼が困惑していると、水のソノヒトは優しい笑みを向ける。

『その種を飲めば、自ずと導かれる。ただし、その身に何が起こっても我を信じ続けるのだ』

妖精の言葉に黙って頷くと、彼は杯に満たされた水で種を呑み込んだ。

## 【夢の中・II】

---

深くて濃い緑色をした森の奥にある小さな教会は、“水の護り”という神を信仰する教会である。  
“水の護りの使い”であるはずの青い鳥は、人に追われ傷つけられ、教会へ逃げ込んでいた。  
「争いに汚された人め……」

意識が戻ったとき、鳥は目の前に人の戦士がいる事に気付く。  
殺される……と思ったとき、戦士は手甲を外して手当をしてくれた。  
「恵みよ、恵みよ。生きる力を、安らぎと優しさを伝えたまえ」  
辿々しい彼の唄は、鳥に暖かさ生きる力を分け与えてくれる。

鳥の目を通して見ていた彼女は、悲しみを獣の仮面で隠す彼に……暖かい気持ちを抱いていた。

## 【異変】

---

真姿を見せつける鏡森を抜けて新しい戦場へ辿り着いたとき、彼の身体に異変が起きる。

飲み込んだ種が、身体の中で急激に熱を放ち始めた。

彼の身体から黒い炎があふれ出し、気付けば姿はニメートルはある黒い炎のケモノビトと化す。

黒い炎が、戦士の怒りを糧にっそう激しく燃え上がった。

『その身に何が起こっても我を信じつづけるのだ』

彼は、水のソノヒトが最後に言った言葉を何度も何度も心の中で繰り返す。

「信じるぞ、その言葉を……」

ケモノの声でそう言うと、身体の中に宿る種の欲求に従って戦場へ入っていく。

## 【ケモノが通る道】

---

黒い炎のケモノビトが戦場に現れたことで驚いた兵士達は、敵味方関係なく一斉にケモノビトを倒そうとした。

しかし、誰もケモノビトを倒すことができない。

ケモノビトが左腕を振るうと剣が砕け、右腕を振るうと槍が折れた。

ケモノビトが右足で大地を踏みしめると斧が壊れ、左足で大地を踏みしめると槌が折れる。

ケモノビトの雄叫びがすべての矢を折り、弓の弦を切っていった。

何百、何千回と武器がケモノビトの身体に突き刺さるが、その度に黒い炎がすべての武器を飲み込んでいく。

敵も味方も逃げ出して戦場に誰もいなくなると、ケモノビトは戦場に散らばっている武器の残骸を食い尽した。

そうすることで、ケモノビトの身体は一回り大きくなっていく。

次の戦場、その次の戦場、その次の次の戦場でもケモノビトは同じことを繰り返した。

## 【呪いを与える者】

---

身の丈が十メートルもある、黒い炎のケモノビトが自分の国に向かってくる……。王座に座る国王は、太陽のように光り輝くモノを大事そうに抱えながら、恐怖に震え上がっていた。

それは、“神玉果の実《しんぎょくかのみ》”と言う。

この実はこの地から天へ昇った神の知恵とも言われ、今では人々や妖精達が暮らすのに欠かせない魔法の力を生み出すモノであった。

国王は、亡き前王の書齋で

『すべての実を集めた者は、神が向かった楽園を開くことができるだろう』と書かれた古文書を発見したことで、この戦争を始めたのである。

「自分一人が、楽園へ辿り着ければよいのだ」

その野望のためだけに、すべての兵士を「国のため……」騙し通した。

## 【誤算】

---

『ケモノが国王の足元をすくうだろう』

宮廷魔術師の占い結果が出た次の日。この国で一番強くて騙しやすい戦士の顔がケモノの顔に変貌し始めた。

「まさか、人がケモノになろうとは……」

占いを実現させるかのように、戦士はケモノビトと化してここへ戻ってこようとしていた。ありとあらゆる武器……宮廷魔術師の魔法や大砲でさえも、あのケモノビトを倒すことができない。

「残るは、この神の知恵が頼りか」

神玉果の実から力を引き出すまでの間、ケモノビトを足止めする必要が国王にはあった。

「そうだ、あの戦士には……確か妻がいたな」

恐怖に打ち負けた国王は、自分が思いついた策に笑い声をあげて喜んだ。

## 【腐れ落ちる実】

---

国王は城中に残っている武器を国中の女や子供達に持たせると、そのまま城壁の上に並ばせ始める。

城の一番高い場所へ登り、城門の真上に立たせた戦士の妻へ向けて神玉果の実を翳した。

「自分の妻と一緒に死ねるのは、さぞ幸せだろう」

巨大な黒い炎のケモノビトが城へ向かって来るのを、誰もがハッキリと理解した。

「さあ、騙されやすい心優しい戦士よ。ケモノになっても妻の姿がわかるなら、歩みを止めるが  
イイ！！」

国王が神玉果の実の力を引き出したとき、突如として実から光が消える。

国王の手の中にあった実は、そのまま腐り果ててしまった。

## 【種の救い】

---

神玉果の実が腐り果てる様を、彼女を始め国中の誰も見つめている。

「この人がこんな姿になってまで戦ってくれたことで、多くの家族が戦場から生きて帰ってきてくれた喜びをかみ締めさせてくれました」

彼女の肩に青い鳥がとまると、その肌は水のような艶を発した。

「国王様は戦場へ兵士を連れて行くだけで、生きて帰してはくれなかったのに……」

城壁に並ばされた人々が武器や盾を投げ捨てると、それらを黒い炎のケモノビトが飲み込んでいく。

『想いは廻り……』

不意に現れた透明で大きな手が、腐り果てた神玉果の実をつまみ上げた。

彼女が立っていた近くに、いつの間にか高貴な女性の姿をした水のソノヒトがいる。

腐りは水によって洗い流され、一粒の種が水のソノヒトの手の平に残る。

『かの者が想う、想い人の元へ帰ってきた』

一粒の種は水のソノヒトの手の平で成長を続け、一つの花となった。

『ケモノよ。今こそ、想いや願いを思い出せ』

## 【願いの果てに】

---

水のソノヒトが手にした花で黒い炎のケモノビトにふれると、戦士は人の声を、想いを、願いをゆっくりと思い出していく。

「戦争が終わったら、妻と一緒に花の種を探しに行くんだ。誰もが争いを忘れ、見上げることしかできなくなる……綺麗な花の種を」

ケモノビトであり戦士であった彼の言葉が終わると、ケモノビトの黒い炎は瞬く間に凍りつく。黒からオパール色へと変わり、ケモノビトだった身体の至る所から木の芽が芽吹いった。芽はすくすくと成長を続け、気付けばそこは星の形に似た花を咲かせる森へ変わっている。まだ成長を続ける森の美しい光景に、国中の誰もが……ただ見上げることしかできなかった。

『この森が光を持って癒し、人の姿へ戻していくだろう。しかし、いつになるかは……』

水のソノヒトは、彼女の姿となって森の真ん中へ降り立つ。

「どれだけ時間が掛かっても、私は待つわ。だって、あなたに花の種を見せたいから」

## 【想いは巡り】

---

「.....ただいま」  
彼は恥ずかしそうに手を伸ばし、  
「おかえり.....」  
彼女は優しく彼の手を握り替えした。